とべとべ
カー、キー、クー、ケー、コー

西内ミナミ　作　　長　新太　絵

913
西内　ミナミ
とべとべ カー、キー、クー、ケー、コー
ちょう　しんた　絵
佑学社　1983
80P　22cm
にしうち　みなみ

とべとべ カー、キー、クー、ケー、コー

定価　880円

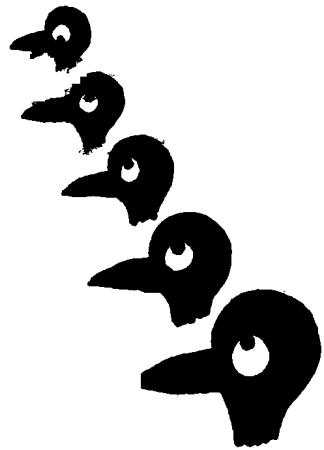
1983年9月30日　第1刷発行

作　者　西内　ミナミ
画　家　長　新太
発行所　会社株式　佑　学　社
代表者　三井数美
〒101　東京都千代田区神田神保町1-46
電　話　東　京 233－3731～4
振　替　東　京5－190823
印　刷　共　同　印　刷
製　本　共　同　印　刷

©1983 Minami Nishiuchi　Illustrations © 1983 Shinta Choh

とべとべ、カー、キー、クー、ケー、コー

西内ミナミ 作
長　新太 絵



1　いたずらっこフライ

森の大きなすぎの木にある、からすのクリーニングや、カーターとカーチャのうちに、五つ子がうまれて　だいぶたちました。

五つ子の名前は、カー、キー、クー、ケー、コー。五わは、そろって　元気にそだって……。元気も元気、毎日森じゅうをとびまわって、なにかめずらしいものを見つけると、あそびのたねにしてしまいます。森の中で、五わに見つからないものと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いったら、じめんの下でねむっている　モグラくらいです。
さて、きょうも、カー、キー、クー、ケー、コーの五わは
「アーッと、朝ごはんまえに、ひとっとび」
「アーッと、パタパタ・ジョギングしてこよう」
元気に、まどからとびだしました。
五わがやってきたのは、パンやのウサコーのところです。
五わが　まどからのぞくと、ウサコーは、あせをとばしとばし、わきめもふらずに　こなをこね、こねたパンだねを、台の上にたたきつけて、パン作りに　せいをだしています。
五わはそのようすを、きょろきょろと　見学していましたが、

ウサコーが、せかせかと　パンやきがまのほうへ　いったのを
みすますと、ケーがまどから　とびこみました。
「ねえ　ねえ、まっ白で　きれいなこな。わたし、おけしょう
してみよっと」
　こなをハタハタと、かおにつけはじめました。
「アーッ、ケーったら、まっ白。シラサギの子みたい。ぼくも、
からだじゅう　白くしてみよっと」
　カーも　こなばこの中へ、ころがりこみました。
　つづいてキーも、クーも、コーも。
　こなばこは、まるで　からすのおふろみたい。

そこへ、ウサコーが、もどってきました。ウサコーは、こなが　もこもこと　うごくので、びっくりしましたが、

「こらぁ、いたずらども、どこの子だ？」

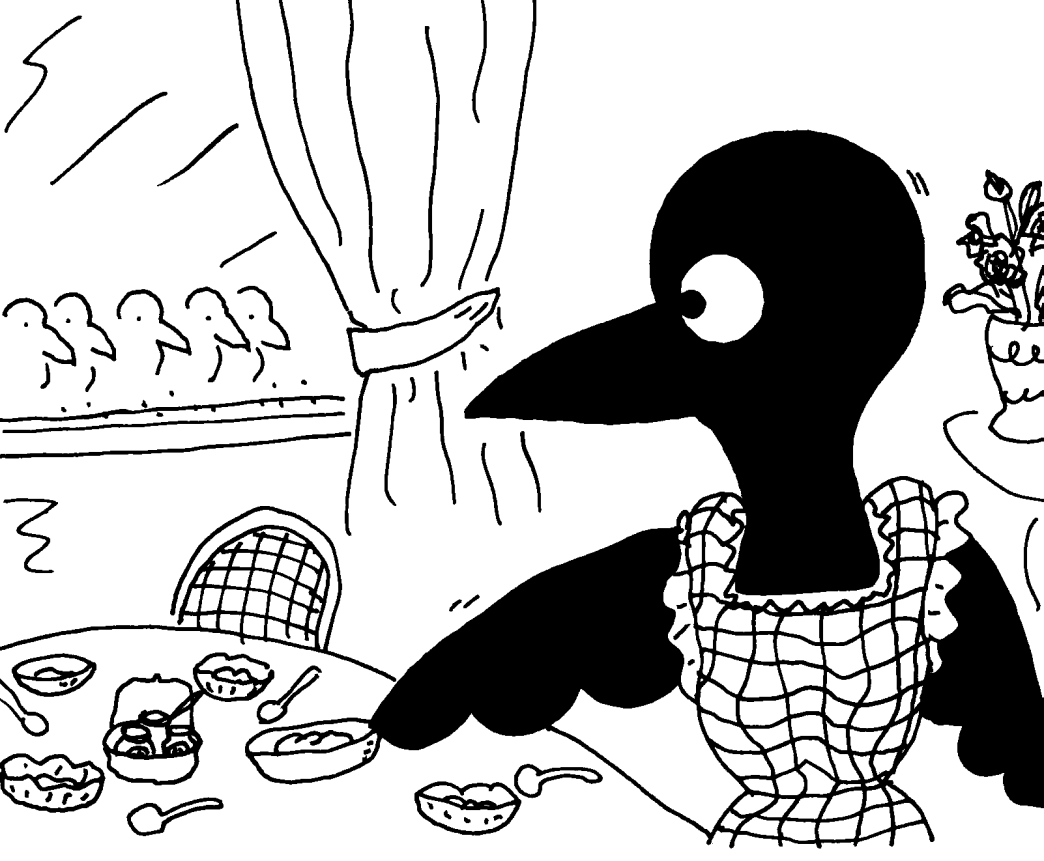
と、五わを、手で　すくいあげました。

「サギだか、ツルだかわからんが、親どもに、よく　いっとかなきゃ。さ、帰った、帰った。わたしは、いそがしいんだから」

五わは　ハフハフわらいながら、とんで帰りました。

家では　おかあさんのカーチャが、朝ごはんを　ならべながら、

「あら、まどのところに、白いとりの子がきてるわ。ツルさん



の子かしら。それにしても、うちの子たちは　どこへいっちゃったのかしら。ものほしばから、見てみましょ」

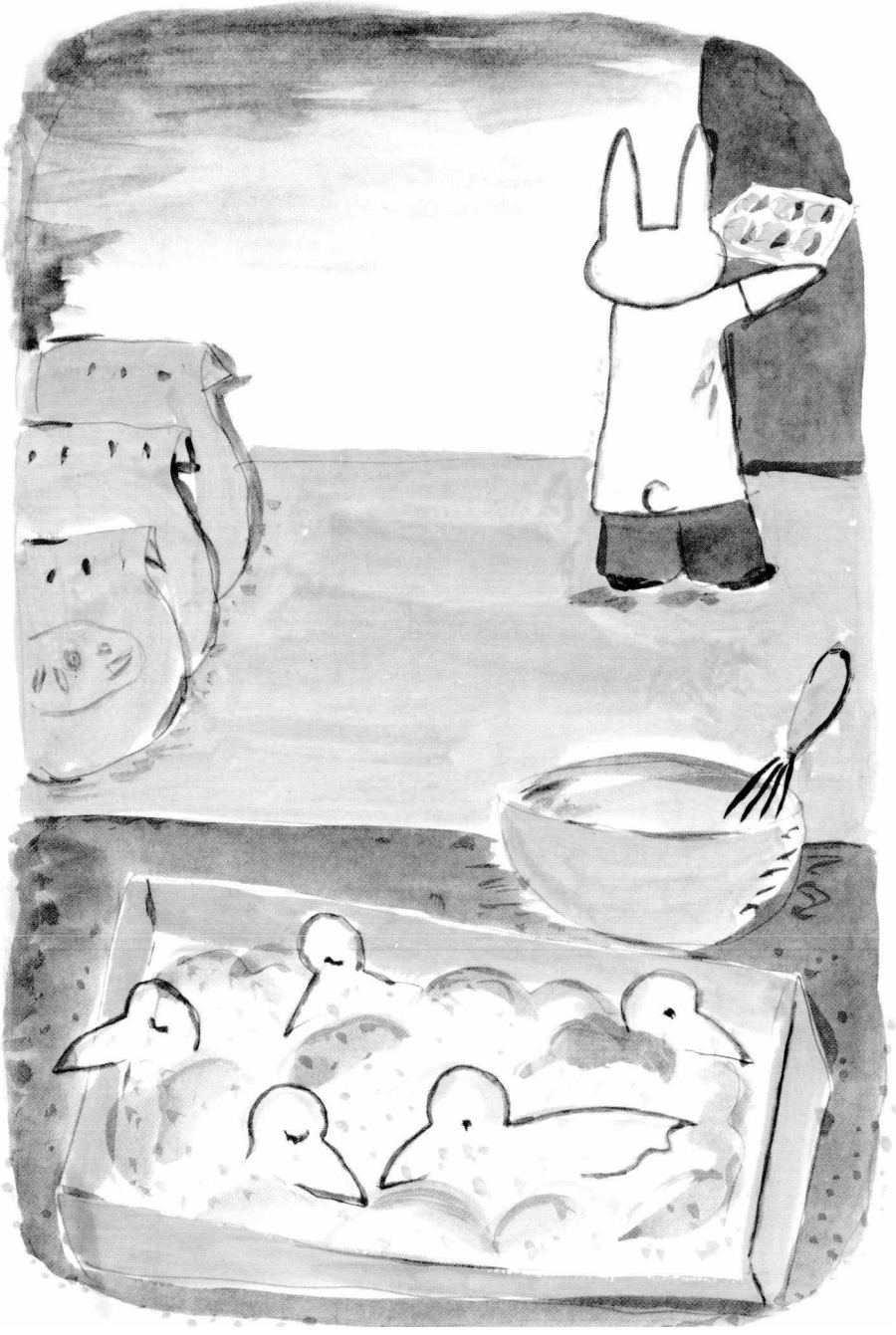
といって、でていきました。

五わは、さっと　とびこむと、朝ごはんを食べはじめ、

「アー、おかしいね。おかあさんにも　わからなかったよ」

「ハー、ツルの子だって」

「アーハハハハ」
あんまり　わらいころげたので、こなの下から　黒いはねが見えて、まだらになりました。
「アーッ、もういっかい、いこうよ」
「うん、もっとよく、こなをつけてこよう」
五わは　また、まどから　とびだしていきました。
ウサコーパンやの、まどからのぞくと、おじさんは　パンやきがまに　つきっきりです。
「それっ！」
五わは　こなばこに　とびこんで、



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

パフパフ　パフ　パフ……。
そこへまた、パンをとりだした　ウサコーが　もどってきました。
「こらぁ、また、いたずらども」
五わは　あわてて、こなばこから　はいだしましたが、カーがつまずいて、そばにあった　ときたまごの　はいっているボールの中へ　ボチョンー。
つづいて、キーも、クーも、ケーも、コーもボチョン、ボチョンと、おっこちました。
「ばっかな子たちだ！」

ウサコーは、そばにあった、えつきの　ざるを　つかむと、たまごの海で　およいでいる　五わをすくって、

「とっとと　お帰り！」と、テーブルの上に　あけました。

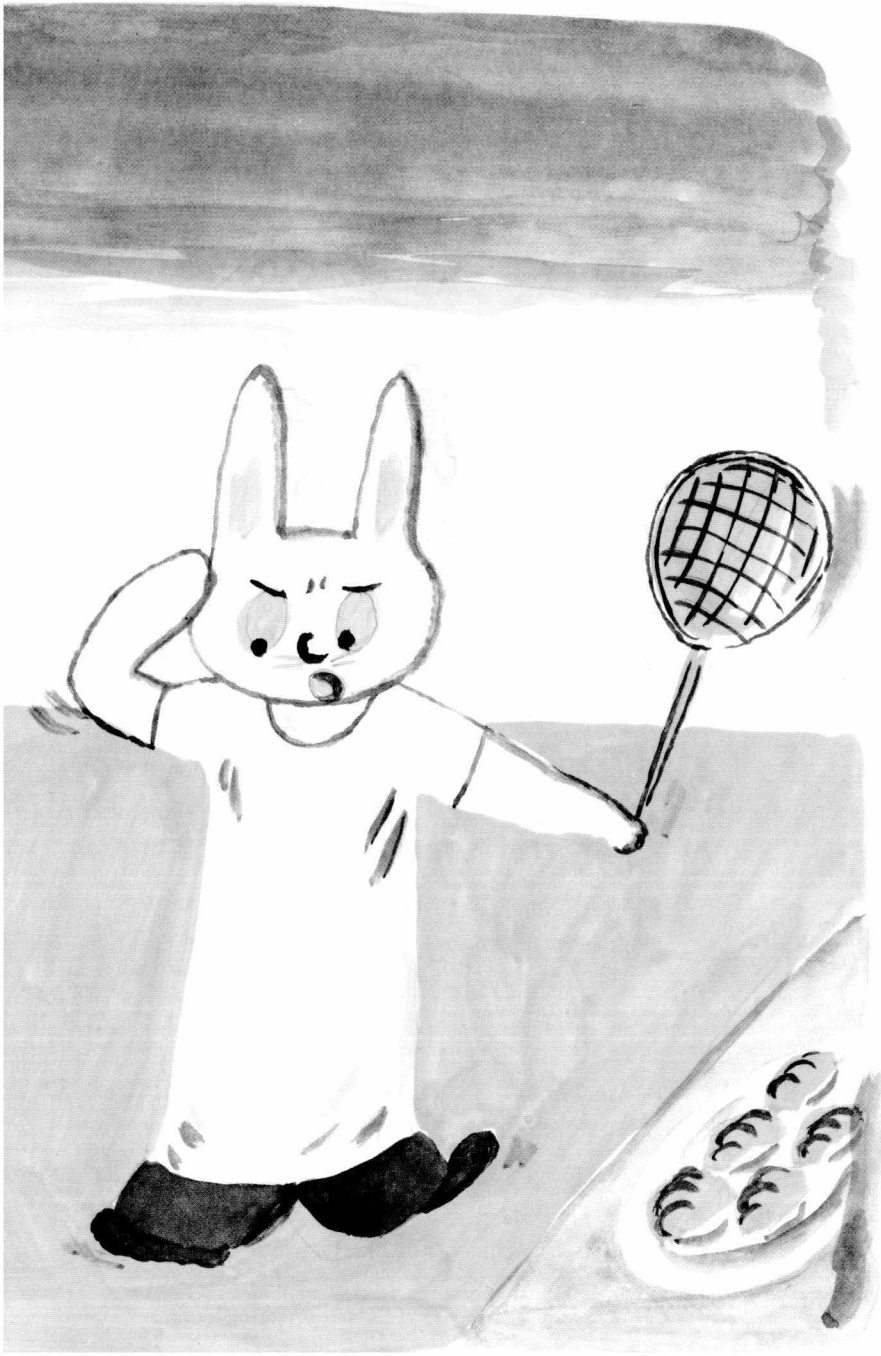
五わは、とびあがろうとしましたが、こなの上に、たまごがからまって、はねがひらきません。

あわてて、テーブルの下へ、とびおりると、そこにあったのは、パン粉のはこ。五わは、パン粉の海へ

バハッ　ボホホッ……と、おちました。

「アー、おほうはん」

「パフー、おはあはん」



五わは、おとうさん、おかあさんと、よんでいるつもりです。
「ほんとに、せわのやける子たちだ」
ウサコーは、またまた　五わを、ざるですくいあげると、
「ふむふむ。こなに、たまごに、パン粉がついて、こりゃあ、フライだね。しかも、ぴんぴん　生きのいい、とりのフライときた。きみたち、フライはすきかね？」と、ききました。
「ハフー　ふきです」
「エヒフハイ、おいひいもんね」
エビフライと、いったつもりです。
「そうそう、エビフライも、トンカツもおいしいが、とりのフ

ライは、とくべつおいしいよ。ひとつ、カレーパンをあげるまえに、この五この　とりのフライを、あぶらで　じゅうじゅうあげて、お昼ごはんに食べようかな……」

五わは　ふるえあがりました。

（まさか……ウサコーおじさんが、生きてるぼくらを、フライにして　食べちゃうなんて……）

「ほへんなはい」「ほへんなはい」

五わは、ごめんなさいと、くちぐちに　さけびながら、おじぎをしようとして、ころころと　ころがりました。

ウサコーは、五つのフライを、ぽいと　まどの外へ　ほうり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com